

「ドライブ・トゥ・ヘル」

—初稿—

2025/8/5

雨森 れに

〈人物表〉

前上まえがみ 耀大あきひろ

(32) 簡単な土木工事を請け負う自営業

加藤かとう 則文のりふみ

(67) タクシー運転手

加藤 真貴子まきこ

(67) 則文の妻

加藤 昇利しょうり

(20) 則文の息子。耀大とは車仲間

依田よだ 准じゅん

(20) 死体。昇利の彼女

1. 山沿いの道（夜）

暗い夜道に道路照明灯がぼつぼつと灯っている。
軽自動車一台走っている。
前上燿大（32）が運転している車である。

2. 車内（夜）

燿大がちらりと道路脇を見る。
シカ標識が立っている。
視線を正面に戻す。
黒い影が飛び出してくる。
衝突音。
燿大の呼吸は荒い。
シートベルトを外し、身を乗り出す。
フロントガラス越しに道路をのぞき込んでいる。

3. 山沿いの道路（夜）

車のバンパー、ボンネットが凹んでいる。
車の正面には依田准（20）が転がっている。
燿大が車から降りてくる。
依田を揺らして、

燿大 「あの！ 大丈夫ですか！」

依田は反応しない。

燿大は依田の喉に手を当てる。
焦った顔をし、依田の口元に耳を近づける。

そして、よろけるように離れる。

車体に寄りかかり、両手で顔をこする。まるで悪夢
を振り払うように。

動きを止め、目をカッと見開く。

周囲を確認し、依田のもとへ戻る。

依田を抱き上げようとする。だが、うまくいかない。

車の走行音が微かに響く。

燿大は、自分がやってきた方向から車のライトが近
づいてくるのを認める。

慌てて依田を持ち上げる。

車の影へ隠そうと引きずる。
が、うまくいかない。

走行音が近くなり、ライトが道を照らす。

燿大、歯を食いしばり、最大の力を出そうとする。

燿大の車の横にタクシーが止まる。

加藤則文（67）が声をかける。

加藤 「おうい。なんかあったかね」

加藤は窓を開けて、様子を伺っている。

燿大はボンネットに両手をつけている。

汗だくで、呼吸が荒い。

依田は車の側面に転がされている。

加藤からは見えない。

加藤 「故障なら手伝おうか」

燿大 「（どもりながら）大丈夫です。ちょっと鹿、鹿にね」

燿大は下を見て、ぎよっとする。

依田の手のひらが覗いている。

加藤 「ええ？ そりや大変だ。どれ（シートベルトに手をかける）」

燿大は怒鳴り声で、

燿大 「大丈夫です！ J A F 呼んでるんで！」

足で依田の手をグリグリと押し込む。

加藤 「そ、そうかあ。なんか、悪かったね」

加藤の視線は道路へ。

道路に異常はなく、血痕すらない。

加藤 「鹿って……」

燿大 「（錯乱したように）あいつ、ぶつかっておきながら逃げ
たんだよ！ ああ、むかつく！ むかつく！」

加藤 「さ、災難だったね……お疲れさん……じゃあ、また」
タクシーが去っていく。

ライトが遠ざかり、カーブで見えなくなる。

燿大は大きく息を吐きだす。

車の後ろにまわる。

トランクを開け、中にある工具を整理する。

それから苦勞しながら、トランクに依田を詰め込む。

4. 車内（夜）

燿大の電話が鳴る。

燿大 「あ、昇利？ 今夜、走りに行く約束だったじゃん？ 急に案件入っちゃってさ。え？ お前もかよ——うん。じやあまた今度」

電話を切り、車を走らせる。

5. 山の中（夜）

山の中奥深く。道路脇から伸びた山岳古道の果てに位置している。

車のライトが燿大を照らしている。

燿大はマイナスインドライバーで地面を掘っている。

なかなか掘り進められず焦っている。

苛立った様子で車に戻る。トランクの中を物色し、折り畳みノコギリと取り出す。

ノコギリを地面に突き立てる。そのまま土をかき分けるようにしながら、必死に掘る

長い時間をかけ、60センチほどの深さまで掘る。空は白み始めている。

トランクから依田を引きずり出す。

穴に無理矢理、詰め込もうとするが入らない。

まだ掘ろうとノコギリを手にし、ハツとする。

依田とノコギリを見比べる。

6. 車内（早朝）

事故現場近くの山沿いの道。

燿大が車を運転している。目には涙が滲んでいる。頬には血を拭った跡。

ハンドルを握る手も血で汚れている。

カーブを曲がり、車を止める。

後ろを振り向き、再度発車する。

少し進んで、また止まり、後ろを確認する。

何かに気づき、頭に血が上ったような顔になる。

アクセルを踏み込む。

7. 道路（早朝）

山の麓に位置する道路。山からの道に対し、赤色点滅信号が点灯している。

誰もおらず、車が走行している気配もない。

そこから少し離れた場所にセルフスタンドがある。

セルフスタンドにはタクシーが一台停まっている。

8. セルフスタンド（早朝）

タクシーから降りる加藤真貴子（67）。

山からくる車がないか確認している。

加藤 「まだじゃないか？」

タクシーから加藤が顔を出す。

真貴子 「でももう朝だし……」

加藤 「すぐ降りてこないってことは隠してんだよ」

真貴子 「にしても手際悪くない？ あの人、大丈夫なの？」

加藤 「昇利も似たようなもんだろ……お、来たな」

山のほうから燿大の車が来る。

加藤は窓を閉める。

真貴子がそそくさとタクシーへ戻っていく。

加藤と真貴子は、燿大の車をじっと見ている。

燿大の車が、猛スピードで点滅信号を過ぎる。

途端にライトをハイビームにする。

9. タクシー・車内（早朝）

真貴子 「ちよつと、気づかれたんじゃない!？」

加藤 「気づかれたって大丈夫だよ。俺に任せとけて」

こちらに向かってくる燿大の車が見える。

10. セルフスタンド（早朝）

急ブレーキ音。

燿大の車が到着する。

燿大は車から出て、タクシーに駆け寄る。

運転手側の窓を殴って、

燿大 「おかしいと思った！ お前がなんかしたんだろ！」

加藤が窓を開ける。

加藤 「ちよつとなんですか。今、お客さんがいるんですよ」

加藤が後部座席を指す。

真貴子が怪訝そうな顔をしている。

燿大 「そいつ、あそこのカーブで乗せたんだろ。エンジン切っ

て、長いこと待ってたんだよな？」

加藤 「あ。あなた、鹿の。大丈夫でした？」

燿大 「カーブでライトが消えたまんまなんておかしいんだよ。

少し進んだらもう一度ライトが見えるはずなのに……」

燿大が窓のふちに指をかける。

燿大 「そいつが死体を投げたんじゃないのか。なあ。まだ他に

もいるよな。一人じゃ重すぎるもんな。いるんだろ」

加藤 「何を言ってるのか……」

燿大 「どこまで見てたんだよ。穴掘ってるときも見てたんか？

バラバラにしているときは？ みんなで笑ってたんだろ？」

燿大が顔を近づける。

加藤の顔との距離は息がかかるほど。

サイレン音。

燿大が窓から顔を引き、サイレンの方向を見る。

数台のパトカーが向かってきている。

燿大が周囲を見渡すと、建物の死角から顔を覗かせ

る男がひとり。加藤昇利（20）である。

燿大、たまらず叫びだす。昇利に向かおうとする。

すかさず加藤が捕まえる。

パトカーがセルフスタンドに到着し、警官数名が降

りてくる。

警官が燿大を取り押さえる。

燿大の怒声が響く。

神妙な面持ちの加藤一家。燿大を憐れむように見つ

めている。